（1）譯詩集。上田敏著。明治三八年一〇月一三日、本郷書院刊。四六判。献辞・序・目次とも二七七ページ。

譯詩集

# 海潮音（1）

上田敏・上田敏譯

明治三十八年

遙に此書を滿州(1)なる森鷗外(2)氏に獻ず

(1) 中国の東北一帯をいう。当時この地方を舞台に日露戦争が行われていた。

(2) 当時鷗外は第二軍軍医部長として滿州に出征していた。

（3）「雨雲」と解する説もあるが（辰野隆『え・びゃん』所収「雨の日」）、おそらく「天雲」の意であろう。

（4）上田敏は何に拠ったものか明らかでないが、前田林外選訂『日本民謡全集（明40・3）』には、下総国玉造村の「香取神社祭獅子舞ひ歌」として、「大てらの香のけぶりはほそくともそらにのぼりてあまくもとなる」と載っている。



大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりてあまぐも（3）となる、あまぐもとなる

獅子舞歌（4）

# 序

巻中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンス(5)に一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派(6)と今の象徴派(7)とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體(8)を飜するに多少の變格を敢てしたるは、其各〻の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徴(9)を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、ゼルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を說けり。譯者は今の日本詩壇に對て、專ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒ら

(5) Provence. フランス南東部の地中海に面した一帯の地方。パリを中心とするフランス語とは異なる、いわゆるプロヴァンス語が行われている。

(6) パルナッシャン(Parnassiaens)の譯語。フランス一九世紀中葉に浪漫派に対する反動として起こった詩派。

(7) サンボリスト(Symbolist)の譯語。フランス一九世紀後半に起こった詩派。

(8) 奥深く美しいスタイル。

(9) Symbol の譯語。ギリシア語のシュンポロンが語源で、もと割符の意味であったのが記号・符牒の意味になり、さらに抽象的な事物を示すための形象または心象の意味となった。十字架がキリスト教の、鳩が平和の、白百合が純潔の、それぞれ象徴であるというがごときである。この意

に晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荊棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば惰なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にゼルレエヌ、ゼルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を說きし時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運の轉移と共に淸新の詩文を解する者、漸く數を增し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫺はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徴候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。佛蘭西のブリュ

ンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る說を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の聲として、其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く贊同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徵派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も淸新體の詩人に打擊を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と說を異にしながら、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て贊意を表さむと試むるも難い哉。

象徵の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必らずしも同一の槪念を傳へむと勉むるに非ず。されば靜に象徵詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ說き及ぼさゞる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人

各(おの〳〵)或は見を異にすべく、要は只類似の心狀を喚起するに在りとす。例へば本書??頁「鷺(さぎ)の歌」を誦するに當(あたり)て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽(パリサイ)の徒と共に虛僞の生を營みて、醜辱汚穢(をゑ)の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲(げうよく)を漁らむとすなり。唯、縹緲(へうべう)たる理想の白鷺は羽風徐に羽擊(はばた)きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬(かうほね)の白く淸らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狹くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜(あ)きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛(たた)へられ、或は空想の泡沫(はうまつ)に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧がるゝ哲人の愁思もほのめかさる。而して此詩の喚起する心狀に至りては皆相(あひ)似たり。??頁「花冠」は詩人が黃昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲(げうよく)」、「驕慢(けうまん)」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛(た)れ、齎らす所只幻惑の悲音のみ。孤り此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り來らざる「理想」は法苑林(ほふをんりん)の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香(れいえん)の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロ

セッティが伊太利古詩飜譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犧牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。されば「東行西行雲眇々。二月三月日遲々」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱が二條の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に從ひたる所多し。

明治三十八年初秋　　上田　敏

## 燕の歌

彌生ついたち、はつ燕、
海のあなたの靜けき國の
便もてきぬ、うれしき文を。
春のはつ花、にほひを尋むる
あゝ、よろこびのつばくらめ。
黑と白との染分縞は
春の心の舞姿。

彌生來にけり、如月は
風もろともに、けふ去りぬ。
栗鼠の毛衣脫ぎすてて、
綾子羽ぶたへ今樣に、
春の川瀨をかちわたり、

しなだるゝ枝の森わけて、
舞ひつ、歌ひつ、足速(あしばや)の
戀慕の人ぞむれ遊ぶ。
岡に摘む花、菫(すみれ)ぐさ、
草は香りぬ、君ゆゑに、
素足の「春」の君ゆゑに。

けふは野山も新妻(にひづま)の姿に通ひ、
わだつみの波は輝く阿古屋珠(あこやだま)。
あれ、藪陰(やぶかげ)の黒鶫(くろつぐみ)、
あれ、なか空(そら)に揚雲雀(あげひばり)。
つれなき風は吹きすぎて、
舊巣(ふるす)喞(くは)へて飛び去りぬ。
あゝ、南國(なんごく)のぬれつばめ、
尾羽(をば)は矢羽根(やばね)よ、鳴く音(ね)は弦(つる)を
「春」のひくおと、「春」の手の。
あゝ、よろこびの美鳥(うまどり)よ、

黒と白との水干(すゐかん)に、
舞の足どり教へよと、
しばし招がむ、つばくらめ。
たぐひもあらぬ麗人(れいじん)の
イソルダ姫の物語、
飾り畫(ゑが)けるこの殿(との)に
しばしはあれよ、つばくらめ。
かづけの花環こゝにあり、
ひとやにはあらぬ花籠を
給ふあえかの姫君は、
フランチェスカの前ならで、
まことは「春」のめがみ大神(おほがみ)。

［ガブリエレ・ダンヌンチオ――『フランチェスカ・ダ・リミニ』］